

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センター

JICA研修員、「帯広氷まつり」に参加

帯広の冬を彩る「帯広氷まつり」（今年で46回目）が市内の緑ヶ丘公園を会場に開かれ、1月30日（金）夜、帯広国際センターの研修員29名が、防寒着に身を固め、体用、足用、手用といくつものカイロを身につけて見学に出かけた。

到着後、ステージ付近の大雪像の前で記念撮影をしたあと、集合時間を確認し、1時間ほど自由に市民や団体が製作した大小の雪像・氷像を見物し、氷の滑り台で遊んだ。途中で花火が打ち上げられた。夏の花火とは趣も異なり、寒い冬、澄み切った夜空にパーンと乾いた音が伝わっていた。

この日は、在館している「感染症コース」11名、「食の安全コース」3名、「農機具コース」7名、「農業ITコース」8名と29名が参加した。場内の味覚コーナーで日本酒を楽しみ、体を温める人も見られた。多くの研修員にとって氷まつりは初めてで、寒いことも含めて楽しんだ様子であった。



イルミネーションに浮かび上がる雪像の前で



夜になって冷えてきましたが、まだまだ元気!



子どもたちと一緒に雪の滑り台で遊ぶ



冬の花火もまた良いもので

晴れやかに「新春文化塾」を開催 —日本の昔遊びを体験—

平成21年1月31日（土）、恒例の「新春文化塾」がJICA札幌、札幌市職員福利厚生会施設「リフレサッポロ」を会場に開催された。

冬の間研修に励む研修員に楽しんでもらおうと、札幌国際センターの会場には、カルタ、双六、剣玉、だるま落とし、輪投げ、福笑いなど日本の昔遊びのコーナーが設けられ、研修員たちは子どもに返ったように初めての遊びを楽しんでいた。ボランティアにお手玉を習っていたケニアの女性は「ケニアにも小石を使った同じような女の子の遊びがあります」と、熱心に練習していた。また、羽根突きに興じていた4人は、15点先取のゲーム形式で対戦して額に汗しながらバドミントンばりのスマッシュを決めていた。

その後、リフレサッポロの和室で大道芸のひとつで歴史のある伝統芸能、



羽根突き、ゲーム形式マッチ



枝垂れ柳ができました。
講師の指導で「南京玉すだれ」を体験

「南京玉すだれ」の妙技が「白石ボニー」の会員3名によって披露された。36本の竹の細い棒を72本の糸でむすんだ“すだれ”を操って枝垂れ柳や橋、魚（鯉のぼり）の形を作り出す。講師の指導で玉すだれを体験したが、「あっ、さて、さて…」の合いの手を入れながら会場はおおいに盛り上がり、因みにスワヒリ語ではありがとうを“アサンテ”というそうで、研修員が喜んでいました。

お昼には、地元の寿司店が出張して目の前で握ったお寿司を賞味しながら交流した。当日は、週末とあって、在館中のJICA研修員など60名ほどが楽しい時間を過ごした。



サムライJICA、剣玉に挑戦

地域の活動



ブラジルの田尻さん

平成20年度「国際理解教室」 頭と身体を働かせて、講師と交流した1年生

昨年、10月23日（木）、札幌市立常盤中学校（札幌市南区常盤）の生徒が野本正信先生の引率で、北方圏センターを訪れた。

北方圏センターでは、地域の学校と連携して諸外国の生活、文化、歴史などの学習の機会を設けて体験してもらう「国際理解教室」を毎年開催しており、今回は同校1年生19名を迎えての開催となった。

今回、講師にお招きしたのは北海道国際課国際交流員のミシェル・アルフォードさん（オーストラリア）、北海道大学大学院の劉旭さん、札幌学院大学大学院の閻玉華さん（いずれも中国）、また北方圏センターで研修中の北海道海外技術研修員の田尻えりかさん（ブラジル）の4名。

当日は職員から国際交流についてのレクチャーを行ったあと、はじめに3つのグループに分かれて質問形式で交流を行った。全員話ができるように10分という短い時間で次々にグループを交代する形で行ったが、生徒たちは日頃から総合学習の時間に国際理解を学んでいるということもあって、すぐに講師と打ち解けて興味津々に講師の話に聞き入っていた。

後半は世界の遊び体験を行った。講師からブラジルの「じゃんけんゲーム」や中国の「おにごっこ」などを紹介してもらって、日本の遊びとの共通点や違いなどを考えながら楽しく遊び、最後には、オーストラリアのカントリーダンスを恥ずかしがりながらも男女手を取り合っ一緒に踊って盛り上がった。

生徒からは、「楽しくてあっという間に終わってしまった」「将来、いろいろな国に行ってみたくなった」など感想が寄せられた。



オーストラリアのミシェルさん



オーストラリアの音楽に合わせて踊りました



中国の講師、劉さんと閻さん